

Note du mardi à la fin de siècle

シャルコーノート

—新講釈 火曜講義—

駒ヶ嶺朋子

日本神経学会認定神経内科専門医

中外医学社

はじめに

19世紀末を現代の目から眺めると、ことさら輝かしい時代だ。日本も開国すると同時に数百年来の封建制度から近代国家へ変貌を遂げた。その頃世界中で、経済・思想・学問体系を中心に、市民への開放が堰を切ったように進んでいった。続く20世紀は大衆の世紀と呼ばれる。医学分野でも病院の診療現場から改革が次々と生まれた。神経学の分野では、フランスのパリ、Salpêtrière（サルペトリエール）病院で Professeur Jean-Martin Charcot（1825-1893）が、診療・研究・教育体制において現代的な臨床神経学を圧倒的な速度で築き上げた¹⁾。

徹底した観察に基づく神経病理学と臨床像の統合により、多発性硬化症や筋萎縮性側索硬化症などの疾患概念を確立させた業績は誰もが承認するところである。一方、晩年には機能性神経障害や催眠の解剖学的根拠を探求したが志半ばで亡くなった。現在もこれらの基盤となる脳機能はまだ解明されておらず、この分野への Charcot（シャルコー）の功績には批判がつきまとう。

Charcot は新しい教育法の開発にも取り組んだ。主に金曜日に行われた系統講義の他に、多くの患者さんに協力を仰ぎゲストとして参加させた臨床講義も行っていた。臨床講義は火曜日に行われていたため、火曜講義 *Leçons du mardi* と呼ばれた。新しい教育に惹かれて世界各地から若手医師が集まり、その中には後に20世紀を席巻する精神分析医フロイト Sigmund Freud や、日本の三浦謹之助もいた²⁾。実際の臨床を再現するため、火曜講義では即興性が重視され、レジメや正確な記録に乏しい。しかし一部は、1887年から1888年の第1巻、1888年から1889年の第2巻として、若手医師 Emmery Blin, Jean-Baptiste Charcot, Henri Colin らによ



目次



Leçon 1

振戦麻痺 1

Paralysis agitante

1888 年 1 月 31 日火曜日 Du Mardi 31 janvier, 1888

Leçon 2

片頭痛 16

Migraine ophthalmique

1887 年 12 月 13 日火曜日 Du mardi 13 décembre, 1887

Leçon 3

腓骨神経麻痺 32

Lésion du nerf sciatique poplitée externe

1887 年 12 月 20 日火曜日 Du mardi 20 décembre, 1887

Leçon 4

Diabetes mellitus と間歇性跛行 52

Claudication intermittente et diabète

1887 年 12 月 13 日火曜日 Du mardi 13 décembre, 1887

Leçon 5

多発性硬化症 77

Sclérose en plaques

1888 年 7 月 3 日火曜日 Du mardi 3 juillet, 1888

Leçon 6

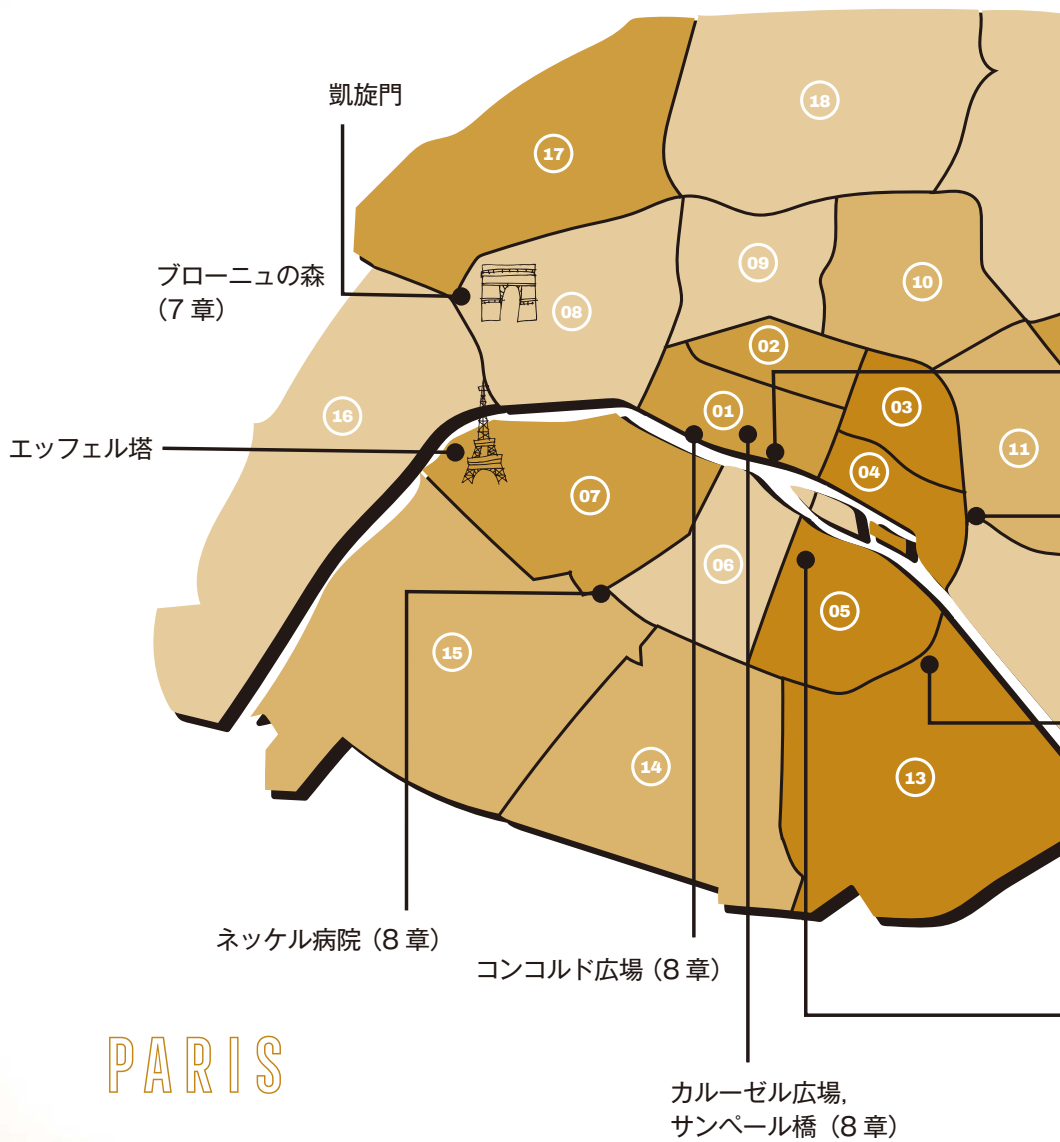
あくび 103

Bâillement hystérique

1888 年 10 月 23 日火曜日 Du mardi 23 octobre, 1888

本書に登場する場所

MAP



PARIS

Leçon 1



振戦麻痺

Paralysis agitante

-1888 年 1 月 31 日 火曜日 Du Mardi 31 janvier, 1888-



生真面目そうな男性がアンテルヌに続いて入室した。アンテルヌは、72 歳の男性であることを Charcot に紹介した。Charcot は男性に椅子を勧め、男性が腰掛けると、目線に合わせて自らも腰掛け、丁寧に言葉をかけた。

「あなたはいつからお困りでしたか。」

「6 カ月ほど前からです。」

「お困りの症状はどこから始まりましたか。」

「手から始まりました。」

「お仕事はなにをしていらっしゃいますか。」

「左官でございます。」

「仕事ができなくなったのはいつ頃からだったのでしょうか。」

「5 カ月ほど前からでございます。」

「何か変わった出来事に遭いましたか。」

「別になにも変わったことはありませんでした。ただ、一度、足を打撲したことがございました。」

「しかしその時は確かもう病気でございましたでしょう。その時は震えがありましたよね。何かほかに事故に遭われたことはありませんか。足場から落ちたことなどは。」

「子供の頃には度々、転びましたが、高いところから落ちたことはありません。」



トの裾をつかんで引き戻すと、今度は同じペースで後ろ向きに進んでしまつて、自ら止まることができないでしょう。

こちらの2人の患者さんを組み合わせると、典型的な Parkinson 病患者であると言えます。私は振戦麻痺から麻痺という言葉の削除したいと思います。患者さんは、自らの症状が麻痺ではないと自覚されていますし、実際に麻痺ではありません。彼らはほとんどの場合、特有の表情、歩き方、姿勢をされていますから、別に他に何を見なくとも、診断を下すことができるはずです。

今、諸君の注意を促した特有の顔貌には、**精神活動の停滞が反映されているようにも見えなくもない**のですが、もし表情から、この患者さんに認知機能低下があると推測するのは大きな間違いです。大多数の Parkinson 病では、最後まで認知機能は少しも障害されないものです。」



ふりかえり

「振戦麻痺」という当時の名称は残らず、Charcot が使用を呼びかけた「Parkinson 病」の名称が現代まで残った。初報はこの疾患にその名を残すイギリスの James Parkinson が6例を報告した書籍 “An Essay on the Shaking palsy” (1817 年) であるが、これを初報と確認したのは Charcot である¹⁾。疾患概念の確立とその事実を知らしめた功績は Charcot によるところが大きい。

本邦では、“An Essay on the Shaking palsy” の全文が日本語訳付きで出版されている¹⁾。この症例報告は少し変わっている。自らの担当患者さんのみならず、街で見かけて声をかけただけの人も含んでいる。いや、だけと言うと語弊がある。というのも、年齢や職業や本人の解釈モデルをきちんと聴取し、さらに病院受診を提案したが受診は希望されなかった、という顛末までをしっかりと記載している。

James Parkinson は医師、著述家のみならず古生物学者でもあった。アンモナイトやイグアノドンに関する著作も発表している。科学関連の稀覯本^{きこうほん}を検索閲覧できる Biodiversity Heritage Library で ‘James Parkinson’ を検索すると、ハーバード大学の比較動物学博物館図書館に所蔵されている『化石・鉱物・岩石研究の概論』が出てきて読める²⁾。この本の図版で紹介された収集化石にはアンモナイトが含ま





アンテルヌ

▶▶▶ インターンとは少し異なる

「アンテルヌ」intern は現代の「研修医」やアメリカのインターンとは異なる。専門に入る前、博士論文を作成する身分の研修医のうち優秀な学術的成績を修めた上位 10% が指名される狭き門であった⁷⁾。Charcot がサルペトリエール病院に指導的立場で在任した 1862～1893 年までの 31 年間のアンテルヌのリストによると、延べ 32 名が務めた⁸⁾。9 月をフランスの年度始めとすると、火曜講義が行われた期間のアンテルヌは 1887 年 9 月～Paul Oscar Blocq, 1888 年 9 月～Ernest Huet である。

左官でございます

▶▶▶ どんな仕事？

佐官は士官、中でも上長官のことで、大佐か中佐か少佐のことだ。72 歳で現役なのでてっきり佐官だと思っていたが、よく見たら左官であった。左官は壁作り職人のことだ。フランス語原文も *maçon*, 石工と書いてあった。それで足場のことなど聞いていたのかと納得した。なお、初版では患者さんは 52 歳と書いてあった。

脳神経内科の診察では、診断のヒントとして職業や生活を問診する。すると、Parkinson 病の患者さんには元教師、看護師、医師、経営者、農家の方が多いように思う。職業に偏りがあるのかどうか PubMed で文献検索すると、複雑なタスクをこなす職業への従事は Parkinson 病のリスクである、という論文がいくつもあった。だがこうした職業の偏りには、農家なら農薬曝露、教師や医師・看護師なら感染症曝露などのリスク因子や、受診機会などのバイアスなのではないかという論文も多くあった。

一方でそういった交絡因子の影響を除いて、高 IQ は Parkinson 病のリスクであるという論文が近年複数出ていた。そのうち一つにスウェーデンの退役軍人 100 万人以上を解析対象とした論文があった⁹⁾。1968～1993 年には、入隊時に IQ テス



Leçon 7



営利目的の催眠術に誘発された機能性神経障害

*Accidents hystériques graves survenus chez une femme
à la suite d'hypnotisations pratiquées par un
magnétiseur dans une baraque de fête publique*

—1889 年 1 月 29 日 火曜日 Du mardi 29 janvier, 1889—



Charcot が足早に外来講義室へ入ってきた。

「諸君、催眠術の効果は今に至るまでに十分讃えられ、むしろ時には過剰に持ち上げられてさいます。そこで、この技術によって起きる有害事象についても話すということが公平ではないでしょうか。時として、この技術は深刻な病状に至る事故を引き起こすことがあります。こうした事故の多くは、医学的にも科学的にも訓練を受けていない、多くは単に営利目的で行う人々によって起きており、残念に思います。我々の目の前にいらっしゃる患者さんは、蚤の市のイベント会場で動物磁気術の愛好家の犠牲になったと言っても決して誇張ではない。実にその模範例です。患者さんは38歳の女性、おととい初めて我々の外来へいらしてすぐ入院したので、私はまだ病歴を深くは知りません。

私は諸君の前で患者さんを問診して病歴をここで直接補っていかうと思っています。しかしこの任務の遂行は、本当のところ、難しいかもしれません。患者さんはこの5日間、かわいそうに、完全なる発話障害にあるからです。彼女は声の高低どころか一言も発することができません。ちょっとした雑音を喉から発することすらできません。彼女は自分の思いを他人に伝える手段として、今も、非常に表情に富んだジェスチャーと、さらに筆談を用いています。この方の場合、運動性失語症が極端であるにも関わらず、不思議と、文字を用いて